

館蔵品から④

堀内正和(1911-2001)
《うらおもてのない帯》
1963(昭和38)年
ブロンズ
高43.0×幅78.0cm

堀内正和の名は、戦後日本の抽象彫刻界を牽引し続けた作家として鮮明に記憶されている。

この《うらおもてのない帯》は、ドイツの数学者メービウス(1790-1868)が指摘した、表と裏あるいは左回り・右回りの区別がつけられない曲面を造形化した彫刻作品。

「視点は複数化するだけでなく、さかさまにしたり、裏がえしにしたりしてみると面白い」、「裏がえし世界観から反骨と宗教が生まれる」と堀内は記したことがあるが、彼の作品では幾何学の知識に哲学的思考を加えて非日常的な三次元

の空間が形づくられているものが多い。

彼の作品の前に立つ私たちは、普段何気なく見ている日常世界に内在する不可思議な視覚世界、あるいは認識という人間の行為に潜む危うさに気づかされることになる。

しかし、堀内作品は単なる空間のトリック、知的遊戯にとどまってはいない。堀内作品には極めて人間的な感覚、ある種の叙情性が、底流として流れていることを忘れてはならないだろう。そして、この叙情性、詩的感情こそが堀内正和の芸術性に大きな役割を果たしていることも。(MI)

